令和5年10月27日　所　報　第172号

所報

氷見市教育総合センター
〒935-0016 氷見市本町４－９
(氷見市教育文化センター内)
TEL　0766-74-8220（代）
FAX　0766-72-8122
E-mail　kyouikukenkyu@city.himi.lg.jp
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://www.city.himi.toyama.jp/hp/departmentTop/kyouiku-i/kyouikukenkyu

知るを愉しむ

氷見市中学校長会　会長
氷見市立西條中学校　校長　光安　淳子

私が、門井慶喜氏による『家康、江戸を建てる』という作品に触れたのは53歳の時でした。現在、日本の首都となっている東京という都市は、実は、徳川家康の指導力によって開拓され、都市としての礎が築かれたのだということを、私はこの作品を読むまで知りませんでした。

1603年、徳川家康が江戸幕府を開き、それから260年余りにわたって江戸幕府が続いたことを、私は知識として知っていましたが、この本と出会い、私の知識は、いかに浅学なものであったかを痛感しました。

今年のＮＨＫ大河ドラマで徳川家康を取り上げると知り、私は再びこの本を手にしました。改めて、戦国という時代に生きた家康という人物の魅力に引き付けられました。そして、更に家康に関する著書等に触れたり、仲間と意見を交わしたりしながら、家康について学び、考えました。私が見聞きしたものの多くは、作家によって描かれた創作の要素が多いということも重々承知の上で、私が学び、考えたことを紹介します。

○　未来を描く

「教務は半年、教頭は１年、校長は３年先までを考えて教育活動を進めなくてはいけない」と言われますが、家康は、何年先まで見据えて江戸を本拠地としたのでしょうか。

家康は、秀吉の命により、所領であった三河を中心にした東海五か国から、相模国をはじめとした関八州への国替えに応じました。当時の関東平野は、北から南に流れるたくさんの川が江戸湾に流れ込み、ひとたび川が氾濫すれば、すべて失ってしまうような湿地帯でした。そんな土地でしたが、家康は、「関東には未来がある」と手つかずの土地を大耕作地帯に変え、京都や大阪に勝るとも劣らない大都市に造り替えました。

家康は、利根川をはじめとした川の流れを堰き止めたり合流させたりして水運を整え、上野や品川の山を削って遠浅の海を埋め立て、船が接岸して荷物を陸揚げできる港を整備しました。神田上水と玉川上水の二つの上水道を建設して、大勢の人が住めるよう飲み水を確保しました。戦国大名たちによって開発された信玄堤といった築堤や築城、治水等に関する高度な土木技術がこの構想を支えていました。戦のない平和で豊かな国を造りたいという家康の願いが、根底にあったことも忘れてはいけないと思います。

○　許し、任せる

私は、教育に携わる者には「器の大きさ」が大切だと考えています。かけがえのない存在である一人一人を、余すことなく受け止めることができる器が必要だと思うのです。そう思っているのに、些細なことに腹を立て、我慢できずに口を出す、私の器は情けないほどの小ささです。

驚くべきことに、家康は、その生涯において何度となく自分に反旗を翻した者を許し、臣下としています。三河一向一揆では、家臣の多くが一揆方に走りましたが、一揆を鎮めた後は、敵に加担したことを不問に付して元の知行地を治めさせました。許され、家臣となったものは、恩を感じ、家康のために力を尽くして、家臣団になくてはならない存在となりました。許し、任せることの奥深さを感ぜずにはいられません。

人は、知的好奇心をくすぐられると、もっと知りたいと興味が湧くものだと思います。この気持ちは、本来、大人も子供もみんながもっている大切な気持ちだと思います。勉強は、「勉めを強いられる」のか、「強く勉める」のかによって、愉しさが変わると思います。誰もが、主体的に力強く学びを進めることが理想だと思います。学びを強いてきたこれまでを反省しつつ、「分かった」「できた」という学ぶ喜びを、仲間と共に積み重ねることができるように、私たちに何ができるのかを考え、実践していきたいと思います。

よりよい教育実践に向けて、学びを深める

夏季研修会の一端を紹介！

「学力向上研修会」　７月 28 日

テーマ　新学習指導要領　算数科　改訂のポイント
講　師　国立教育政策研究所
教育課程調査官　笠井　健一　先生

教師の役割として、「子供がつまずいているところで立ち止まり、分からない子供の代わりに問い返すことが大切」「先生は、説明したい思いをぐっとこらえて質問する」等、授業のねらいをどれだけ焦点化し、学び合う場を設定するのか、学習指導要領　算数・数学科の改訂のポイントを踏まえ、具体例を示しながら教えていただきました。

また、授業後の協議会においては、「授業のねらいをクラスの子供たちは全員達成することができたか」という視点で、具体的な子供の姿を基に協議すること等、指導と評価の在り方についてもご教示いただきました。

「教育セミナー」　８月１日

テーマ　主体的・対話的で深い学びを教室で実現するために
～ 一人一台情報端末活用も踏まえて ～
講　師　岐阜聖徳学園大学教育学部
教授　玉置　崇　先生

玉置先生は、「主体的に」「対話的に」「深い学びに」を数値的に評価する難しさを説かれ、教育の成果については、エビデンス(数字)よりもエピソード(具体的な姿)で語り合うことの必要性を力説されました。また、教師は、児童生徒が心理的な安心感を抱くことができる教室・職員室づくりに努めるとともに、子供と子供のつなぎ役となり、対話のよさを実感させる授業等を行うことが大切であると話されました。

一人一台端末を、対話を成立させるツールの一つとして活用したり、協働的な学び・主体的な学び、振り返りの深化等のために利用したりすることの可能性も示唆してくださいました。

「ふるさと教育研修会」　８月４日

内容　氷見市立博物館、富山県栽培漁業センターの見学、仏生寺川での体験活動

本研修会は、郷土に対する理解を深めるとともに、教材としての活用方法を探ることを目的として毎年実施しているものです。博物館では小谷館長に展示物の解説をしていただきました。県栽培漁業センターでは、魚と触れ合う体験等を通して参加者の笑顔が広がりました。仏生寺川では、実際に胴長を着用し、歓声をあげながら夢中になって魚を追いかけました。参加者は、体験を通して氷見の魅力に浸ることができました。

「生徒指導研修会」　８月８日

テーマ　生徒指導提要（改訂版）の理解と活用
講　師　東京学芸大学教育学部
准教授　伊藤　秀樹　先生

伊藤先生からは、生徒指導の定義が、「児童生徒の成長と発達を支える生徒指導となっていること」、生徒指導の目的は、「児童生徒が社会の中で自分らしく生きる存在となること」であり、全ての児童生徒が対象となることをご教授いただきました。また、四つの原則（「差別の禁止」「児童最善の利益」「生命・生存・発達に対する権利」「意見を表明する権利」）を重視することの大切さについて、具体的な事例を挙げながら、丁寧に説明してくださいました。

「いじめと不登校の理解と対応」では、安全で安心な学校・学級づくり、居場所づくりの大切さとポイント等も教えていただき、児童生徒との関わりに向けて、新たなスキルを身に付ける場ともなりました。

第２回　若手教員研修会　８月 22 日

テーマ「『特別の教科 道徳』その使命と役割」　講師　金沢工業大学　教授　白木　みどり 先生

白木先生は、「道徳は、人間としての生き方についての考えを深める時間、内面的資質を主体的に養っていく重要な時間であり、子供との対話を楽しんでほしい」と力説されました。また、教材研究に取り組む際の「図解ノート」を紹介され、実際に資料を基に考えながら作業する時間もありました。参加者は、授業づくりについて体験を通して多くのことを学び取っていました。

「だれのための道徳の授業か！」「子供一人一人の考えや感じ方を大切に！」と、白木先生が何度も繰り返された言葉が、深く心に残りました。

ENGLISH セミナー2023　～私のおすすめする「ふるさと氷見のすてき！」～

7 月 27 日（木）に、市内小学校・義務教育学校の 25 名の 6 年生が、主体的に英語を用いて、愛するふるさとを紹介する「ENGLISH セミナー2023」を開催しました。

第一部の「ALT タイム」では、小学生が英語のクイズに答え、ALT について楽しく知ることができました。また、チームに分かれ、知っている英単語で答える「The Picnic Game（ピクニック・ゲーム）」を行い、参加者相互の交流を深めました。

第二部の「プレゼンテーション」では、各々が準備した写真を活用し、国内や氷見市内に関する「ALT におすすめの場所や食文化」等を英語で紹介しました。発表者は、聞き手に伝わりやすいよう、ゆっくりと明確に、ときにはジェスチャーを交えてプレゼンテーションを行い、外国語科での学習の成果を発揮していました。

＜ALT クイズに解答＞

＜ピクニック・ゲームで交流＞

＜英語でプレゼンテーション＞

小・中学生の力作が大集合！

＜氷見市児童生徒科学作品展覧会＞

開催期間　９月９日（土）～10 日（日）
開催会場　氷見市教育文化センター　４階ホール

今年度の児童生徒科学作品展覧会には、小・中・義務教育学校から 62 点の作品が集まり、245 名の来場がありました。継続的な観察や地道な実験等を通して、自らの疑問を解決している作品、また、興味・関心を抱いた事象に対して、子供らしい視点から追究を重ね、工夫を凝らしてまとめ上げた作品等、力作揃いでした。

審査の結果、以下の４作品が、富山県科学展覧会（10/19～10/23、富山市科学博物館）に出品されました。

作　品　名	学校・学年	名　前	県科学展
ふしぎなふしぎなしゃぼんだま	比美乃江小学校　２年	千葉　実理	創意工夫賞
ぼくんちにやってきたカニのひみつ　パート２ ～しぜんのカニはどうくらしているのか～	比美乃江小学校　３年	洲崎　佳佑	研究努力賞
かぶと虫王国を作ろう④ ・カブトムシが土をななめにする謎に迫る　part２ ・長期生存できるカブトムシの特徴は？	窪　小　学　校　６年	辻　百英乃	研究努力賞
細胞膜を通した液体の移動は一方通行なのか？ パートⅡ	西 條 中 学 校　２年	安藤　涼太	創意工夫賞

ICT教育の推進に向けて

【「e ライブラリアドバンス」活用研修会】

9 月 12 日（火）に、オンラインで開催し、25 名の先生方が参加しました。実際に端末を操作しながら、児童生徒に課題を出題する方法等の研修を行いました。

今後一層の活用を進めていただきたいと思います。

【1 人 1 台端末時代の ICT 活用講座　サテライト会場研修】

9 月 21 日（木）に、株式会社スキルの西谷さんをお招きして、Excel と Word、Microsoft Whiteboard について、授業や校務での活用の仕方を実際に操作しながら研修しました。また、OneDrive の活用の仕方についても教えていただきました。

新規採用教員　－ 半年を振り返って －

子供たちが元気に活動する学級を目指して

宮田小学校　岡田　拓丸

臨任講師を経て、教員となって半年間。３年生の担任として、活発で行動的な子供たちの言動に一喜一憂しながら、担任という責任の重さを実感する毎日を過ごしている。９月の校外学習では、３・４年生縦割り班活動を行った。昼食後に自分たちでごみを拾う姿、時間を守ろうと声をかける姿、協力してレクリエーションを進める姿が見られた。担当した係の仕事を頑張る姿に、１学期と比べて成長を感じ、うれしく思った。

そんな子供たちが「元気に過ごせる学級とは」「学ぶことを楽しいと感じられる授業とは」と、日々問い続け、一人一人が輝ける学級づくりを目指して、これからも努力していきたい。

教員としての半年間を振り返って

窪小学校　片原　純怜

教師になってから早、半年が過ぎた。１年生の担任になると決まったときは、不安と同時に、わくわくした気持ちだった。

子供たちのよさを伸ばせるような教師になれるよう、クラスの子供たち全員と目を見て話すことに取り組んできた。最初は子供たちと話をしたり、聞いたりするだけで精一杯だった。今は、子供の話を聞きながら、子供たちがどういうことを考えているか、また、行動の背景にはどんな思いがあったのかを感じ取り、少しずつではあるが、一人一人の子供のよさに目を向けることができるようになってきた。

これからも自分の理想の教師となれるよう、日々努めていきたい。

半年間を振り返って

北部中学校　祖父江　宇天奈

教員になり、あっという間に半年が過ぎた。試行錯誤の日々の中、失敗することも多いが、生徒の明るさや同僚の先生方の温かさのおかげで元気に教壇に立つことができている。

理科では、身の回りの不思議に疑問をもち、考える楽しさを感じてもらいたいと考えている。そのために生徒自ら課題を見付け、課題解決に向けた手立てを考えられるように、生徒の主体性を生かした授業づくりを行っていきたい。また、間違いを恐れず、自由に考えを述べられるような雰囲気づくりとともに、話合いや意見を共有する機会を多く設け、生徒一人一人の活躍の場を大切にしていきたい。

支えてくださる先生方への感謝を忘れず、生徒と共に成長していきたい。

栄養教諭としての半年間を振り返って

北部中学校　江渕　萌香

念願の栄養教諭となり、あっという間に半年が過ぎた。念願の職であったものの、食に関する指導と学校給食の管理を一体のものとして行うことは、簡単なことではないと実感している。しかし、給食の時間に子供たちと接する中で、「美味しい」と食べてくれることや、「この食材にカルシウムがたくさん含まれていたんだ」と理解を深める姿を見ることに、やりがいを感じている。

「食べることは生きること」という言葉がある。これからも給食を教材として有効に活用し、食に関する指導から子供たちの生きる力を育んでいけるよう、食の大切さや楽しさを伝えることに努めていきたい。

半年間を振り返って

西の杜学園　福田　彩乃

新規採用されてからこの半年間、西の杜学園の素直な児童生徒と教職員の方々に支えられながら、充実した日々を過ごしてきた。子供たちが、授業を通してできるようになったことを披露してくれたり、目を輝かせて物事に取り組んだりする姿を見ると、うれしい気持ちになる。この瞬間に立ち会える喜びは、教師のやりがいの一つであると実感する。これからも、子供たちの成長に寄り添っていきたい。

「できるようになりたい」「分かるようになりたい」という子供たちの思いを叶えるために、教師として力量を高め、なりたい自分に向かって頑張る子供たちを育てていきたい。